

発刊のことば

いま、国連主催の人間環境会議がストックホルムで開かれ環境外交の嵐が世界を吹きまくっている。

今まで、ただひたすらに前進をつづけてきた科学と技術が、いつのまにか「人間の健康と幸福」という道からはずれて別な世界に踏みこんでしまったことへの認識と反省であろう。この時空に立って現実をフランクに直視すれば、われわれは今どこにいるかを知り、ここから脱出する手段を冷静に考えるときである。物理学と化学の進歩は予想もしなかった余波を生物体におよぼしたが、このことは生命の問題についての基礎的理論がめざましく進んでいることと一見矛盾しているように見えるが、これが現代科学の特徴なのだ。

人々はよく分子生物学は現代科学であり、古典生物学は十九世紀の遺物で古くさいと言いが、このような見方は皮相的であって正しくはない。分子生物学の花は古典生物学の根の上にさいた小さな花であり、生物学全体ではありえないからだ。いいかえると、複合されたシステム全体の持つ特質は必ずしもその部分部分の解析されたデータだけでは説明できないということである。小さな電顕の像から生体の変化のすべてを知りえないし、小さなカゴの中で限定された条件の下に行なわれたマウスやラットの実験データだけでは、大きな自然の中で適応し、耐え忍び、やがて倒れゆく動物、植物、人間の全体像を把握しえない。それは条件を前提とした真実の追求である。古典生物学の領域でもまだ解明されていない多くのネックがあるのだ。

科学者は自分の研究課題をえらぶ自由をととても大切にす。研究の自由、それ自身は良いことだ。そしてそれぞれの研究を通してすばらしい発見をすることもある。地球の花園には赤一色ではなく、白、黄、青、紫、橙とそれぞれ個性ゆたかな花を咲かせることも大切である。このような研究の分析と解明の方向は個々人の特殊化と専門化、別な言葉でいうと深化はたしかに求められる。だがその事象全体にまたがる統一性、連続性、相関性を見逃すことがしばしばである。今一つは自己陶醉におちこんで研究の中に埋没してしまつて、科学は何のためにあるのか、科学者はだれのためにあるのか、この研究は何のためにするのかという目的を見失い、研究のための研究に流れてしまうこともある。

今、世界の研究の流れは大きく変りつつある。big Scienceとして、一つの重要なテーマに金と物と人を集中して総合戦果をあげようとめざしている。

北海道立衛生研究所も22年の歴史の中で果たした役割は大きい。世界の科学の方向にそつて、個々の花を咲かせつつ、プロジェクトチームを組んでこの3年の間に全体の手で一つの大輪の花も咲かせようと研究員全員が意欲を燃やし、行政検査、依託検査、重点研究の中で山を高くすることとその裾野を広くする両面作戦を展開している。北海道の創造的で豊かな行政、いいかえると道民のよりよい生存と生活と幸福とに研究のターゲットを合わせて。

この所報はこの1年の花である。

昭和47年6月

北海道立衛生研究所長 安倍三史